

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	仙台市	番号	13
-------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	児童生徒数
仙台市	仙台市立鶴巻小学校	414

○ 調査研究の内容

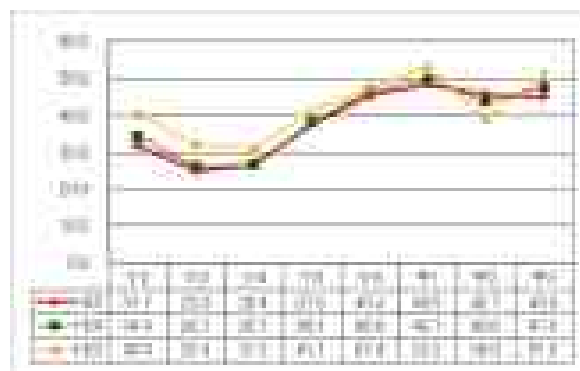
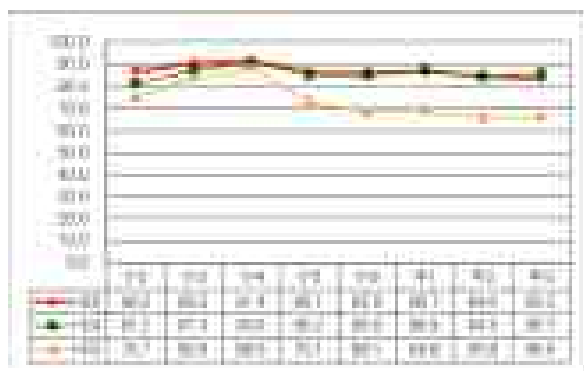
1. 推進地域における取組

本市独自に実施している「仙台市標準学力検査」における、基礎的知識及び応用力における市平均正答率は、小・中学校ともに、全ての学年・教科で目標値（設問ごとに正答できることを期待した児童生徒の割合）を上回っている。また、目標値と同等以上の児童生徒の割合（表1）については、基礎的知識において6割から8割となっている。言い換えると、目標値に達していない児童生徒も3割程度存在していることになる。

【表1：基礎的知識における正答率が目標値と同等以上の児童生徒の割合（単位：%）】

対象学年／教科	国語	社会	算数	理科
小学校3年生	69.4	—	78.1	—
小学校4年生	78.2	79.6	81.1	73.4
小学校5年生	75.6	75.7	75.8	67.4
小学校6年生	78.3	73.6	74.0	72.1

対象学年／教科	国語	社会	数学	理科	英語
中学校1年生	72.5	63.9	66.3	62.1	—
中学校2年生	78.3	78.1	71.6	70.9	73.6
中学校3年生	75.0	69.1	67.8	63.6	68.0



【グラフ1：疑問に思ったことは、調べたり、人に聞いたりする】

【グラフ2：学校の授業時間以外に、普段(月から金)、1日当たり1時間以上勉強する(学習塾・家庭教師等を含まない)】

「仙台市生活・学習状況調査」における「学習意欲」に関する項目において、9割近い児童生徒が、「普段、疑問や不思議に感じるがよくある」と回答している。また、「疑問に思ったことを調べたり、聞いたりする（グラフ1）」と回答した児童生徒の割合が8割を超え、昨年度に比べて、小学校で増加している。しかし、「学校の授業時間以外に、普段（月から金）、家で1時間以上勉強する（グラフ2）」と回答した児童生徒の割合が、昨年度に比べ、中学校2年生以外で減少している。

このような状況から、本市全体での「学力向上」と「学習意欲の向上」と推進校（鶴巻小学校）への支援に取り組んだ。

（1） 学力の向上

目標値に達していない児童生徒が3割程度存在している現状を踏まえ、学力の底上げを図らなければならない。そのために、宮城教育大学、教育委員会、市内小中学校教諭、教頭、校長で組織する「確かな学力研修委員会」が学力検査等の結果から学力の定着に課題がある単元等を把握し、その定着に向けた指導改善例を示した。

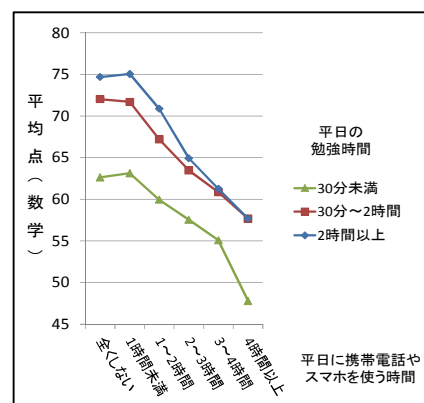
また、理科・社会においては、学年が上がるにつれて度数分布が高原型になっていくことも課題であると認識しており、仙台市教育センターや社会教育施設と連携した高学年教科担任制での理科担当者への研修等を実施するとともに、指導主事等が実施校を訪問し、取り組み状況の確認と実践的指導力の向上に向けて指導助言を行った。また、実施校の実践について情報交換会を2回実施した。

児童生徒を取り巻く環境の変化として、家庭や社会の教育力の低下が指摘されており、保護者と一緒に過ごしたり、家庭学習に取り組んだりする時間が少ないという実態がある。この課題を改善するための一助として、児童と保護者が一緒に取り組むことを目的に本市が独自に作成した「家庭学習ノート（小学校3年生用算数、5年生用国語）」の一層の活用の啓発を図った。さらに、小学校卒業から中学校入学までに活用できる学習課題「せんだいOne Step ノート」を作成し、小中連携の一助として活用の啓発を図った。

（2） 学習意欲の向上

学力向上においては、学習方策や指導手法に加えて、学習意欲の視点をもつことが重要であり、東北大学加齢医学研究所（川島隆太教授ら）とともに、「仙台市標準学力検査」及び「仙台市生活・学習状況調査」の結果を分析し、学習意欲に関する科学的な研究を進めてきている。

これまで、学習意欲と学力の関係について明らかになってきたことを提言としてリーフレットにまとめた。今年度は、スマホや携帯電話などの使用時間と学力の関係（グラフ3）などをまとめ、全教職員、全中学生に配付し、健康的な生活習慣や学習意欲・学習態度を支える目標意識や知的探究心について考える一助とした。また、PTA協議会と連携し全保護者に対しても、同内容のリーフレットを配布する。



【グラフ3:携帯電話やスマホを使う時間ごとに

見た数学の平均点】

【学習意欲の科学的研究に関するプロジェクト】

開催日	進捗状況
平成25年 7月	・「仙台市標準学力検査」及び「仙台市生活学習状況調査」の結果報告

平成25年10月	・「仙台市標準学力検査」及び「仙台市生活学習状況調査」の分析報告
平成25年12月	・スマホなどの使用時間と学力の関係について速報発表
平成26年1月	・学習意欲の項目の妥当性指標の検討 ・次年度「仙台市生活・学習状況調査」の質問項目改訂 ・学習意欲リーフレット内容検討
平成26年2月	・次年度「仙台市生活・学習状況調査」の質問項目決定 ・学習意欲リーフレット内容決定

(3) 推進校への取組

学力検査等の結果を受け、現状の結果分析からの課題の把握と今後の方策について、教育委員会から指導・助言を行った。また、推進校の教員を対象にした指導力向上のための研修会を仙台市学力向上推進協議会の外部有識者により開催した。さらに、児童・保護者を対象にして、生活や学習習慣と脳科学との関係についての講演を行った。

2. 推進校における取組

(1) 学力の定着に関する取組

① 校内研究の充実

・ 実践授業

「自分の考えを持ち、相手にわかりやすく伝えることができる児童の育成」を研究主題とし、児童の表現力を高めることで、学習内容の定着と学習意欲の向上を目指した。実践授業では、「一人一授業」を基本とし、全教員による授業公開をH25年6月～H26年1月にかけて行った。また、各学年部による代表者授業を年4回設定し、授業後には全体で検討会を行い、各学年部で提案している手立ての有効性を確認し、次の実践授業へつなげられるよう取り組んだ。

・ ワークシート活用とノート指導による学習指導の向上

自分の考えをあらかじめワークシートに書き込んでから発表することで、自分の考えを持って授業に参加できるようにワークシートを活用した。また、ノートの書き方を学年部単位で統一し、わかりやすく整理されたノート作りを目指した。

・ 「数学的な考え方」を伸ばす指導の工夫

「数学的な考え方」を伸ばすために、文章問題に着目して取り組んできた。問題文に下線を引いたり、記号を書き込んだりすることで、問題場面をより把握できるようにする手立てを学年部単位で統一して指導した。

② 少人数指導の実施

3年生以上の学年において、少人数指導を年間通して行った。また、1年生では後期より少人数指導を実施し、低学年からきめ細かな指導を行い基礎的知識の確実な定着を図った。

③ 「すくすくタイム」「キラキラタイム」の実施

国語（主に音読・漢字・読書）と算数（主にスキル問題）に取り組む「すくすくタイム」を毎朝10分間設定し、基礎・基本の学力の定着を図った。また、個別指導を要する児童を対象にした「キラキラタイム」を設け、下位層の児童の学力及び学習意欲を高める手立てを講じた。

(2) 学習習慣の確立に関する取組

① 職員研修の実施

教員を対象に、東北大学の荒木剛助教による学習意欲と学力向上についての研修を実施した。また、書いて覚えることの大切さや友達との関わり方、朝食などの正しい生活習慣について、児童・保護者・教員を対象に、東北大学の川島隆太教授による講演会を実施し、生活習慣の見直し

及び改善について啓蒙を図った。

② 放課後や休日の学習支援の充実

放課後に週2回児童の宿題をサポートする「まなびのひろば」、夏季休業中に多様な学びの場を設定する「おもしろ教室」、夏季休業中に児童が読書や調べ学習に取り組めるように「長期休業中の図書室開放」を行い、児童の学びの場や機会を増やすことに取り組んだ。

③ 生活学習習慣の見直し及び改善

「家での生活を振り返ろう」と称し、年3回（6月・11月・2月）に児童が「早寝・早起き・朝ごはん」や家庭学習時間など全8項目の家庭生活を振り返る期間をそれぞれ1週間設定した。実施後は、児童と保護者が振り返りができるようになっており、生活学習習慣の見直し及び改善を図った。また、集計結果を保護者との懇談会資料として活用し、家庭へ啓蒙を図った。

④ 「おすすめ図書」カードの活用

学年毎に「おすすめ図書」カードを作成し、児童が読書の時間を使っていろいろなジャンルの本を読むように推進した。

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

(1) 学力の定着に関する取組

本調査より、短時間でのスキル学習の繰り返しや既習内容のフォローアップが、技能や知識・理解の観点における学力を高めることに有効であることが明らかになった。一方で、「数学的な考え方」を向上させる手立てを引き続き探っていくことが今後の課題である。そのために、「理由をもとに判断する力」「具体的に説明する力」を中心に、学習指導を通して児童に身に付けさせていくことを今後の研究の方向性とした。

(2) 学習習慣の確立に関する取組

本調査より、1週間という限定された期間であれば、児童の家庭学習時間に対する意識を高められることが明らかになった。今後の課題としては、より長期間における児童の学習習慣を確立するための手立てを探っていくことである。そのために、児童が自ら生活・学習習慣の振り返る場面を意図的に設定し、取組を日常化していきたい。さらに、保護者に対して、引き続き家庭学習の必要性や重要性を啓蒙していきたい。

2. 調査研究全体の成果

(1) 学力の向上

「仙台市確かな学力研修委員会」において、平成25年4月に実施した「全国学力・学習状況調査」と「仙台市標準学力検査(※1)」の結果分析を行った。その結果を受け、小学校4教科、中学校5教科において課題改善のための授業を提案し、参観者とともに検討会を行った。今年度は教員経験5年目の研修の一環として教員の資質向上を図ることができた。また、結果分析から明らかとなった各教科の課題改善策や提案授業について、普及・拡大を図るための「学力向上に関する調査・実践報告書」を作成し、全ての小・中学校に配付した。

「全国学力・学習状況調査」及び「仙台市標準学力検査」における、仙台市及び推進校の平均正答率や目標値の関係から把握できる成果については、次年度の結果待ちである。

平成24年度「提案授業」	参加者 381名 (学生を含む)
平成25年度「提案授業」	参加者 489名 (学生を含む)

(※1) 小学校3年：国語，算数 小学校4年～中学1年：国語，社会，算数，理科
中学校2～3年：国語，社会，数学，理科，英語

(2) 学習意欲の向上

学力の根幹を成す「学習意欲」について、学校現場での経験や授業観察を通して得られたデータ、「仙台市生活・学習状況調査」における学習意欲に関するアンケート結果を基にまとめたリーフレットを作成した。

平成24年度	教職員用 6,200部作成 小中学校全教職員に配付
平成25年度	教職員用 6,200部作成 小中学校全教職員に配付 中学生用 28,000部作成 全中学生に配付 (保護者用 (PTA 協議会作成) 全保護者に配付)

(3) 推進校

教員の実践授業の実施、少人数指導や個別指導、家庭学習の習慣化に向けた取組等、学校全体で学力向上に取り組むことができた。また、学習意欲を支える生活習慣などの重要性についても認識を新たにすることができた。

(4) 総括的評価

教育委員会と学校だけでなく、外部有識者による協力を受けながら学力の向上や学習意欲の向上に取り組むことができた。

3. 取組の成果の普及

◆ 研修会等の開催

学力検査等の結果から把握した課題を改善のための提案授業を公開し、教員及び宮城教育大学の学生が参観した。また、各学校の学力向上担当者を対象に、今年度まとめたスマホ・ゲーム・パソコンなどの使用時間と学力の関係を含めた「生活習慣や学習意欲と学力向上の関係」について研修会を実施した。

◆ リーフレット等の作成

学習意欲に関する内容をリーフレット等にまとめ、全小中学校教職員、全中学生に配付した。

◆ 実践事例集の作成

学力検査の分析結果や、指導改善に向けたポイントや提案授業における指導案等のまとめた「学力向上に関する調査・実践報告書」として全小中学校に配付した。

各学校の「学力向上プラン」を「学力向上プラン25集」としてまとめ、他校の取組を参考にすることができるよう全小中学校に配付した。

◆ イン트라ネットによる情報提供

「学力向上に関する調査・実践報告書」に記載した事項について各教員がダウンロードして活用できるようにした。また、小学校卒業生が中学校に入学する前の学習課題を掲載し、学校の状況に合わせて活用できるようにした。

○ 今後の課題

学力検査等の結果分析をより充実させるため、「学力分析サポート」訪問を実施する。

授業改善に向けて、より一層の共通理解を図るため、提案授業を参観する教職員を増やすとともに、提案授業を基にした教員研修等を進めるなど、指導方法の工夫・改善に関わる実践的な取組を充実させていく。

児童生徒の学習意欲を高めるために、仙台自分づくり教育（仙台版キャリア教育）をさらに進めるとともに、リーフレットや保護者会を通して保護者と情報を共有するなどの手立てを図っていく。また、今後も、脳科学、教育現場等の知見を活用し、学習意欲の指標と評価について研究し、広く周知していく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	仙台市	番号	13
-------	-----	----	----

推進校名	仙台市立鶴巻小学校
------	-----------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

(1) 学力の定着

- ① 授業のねらいを明確にして授業を展開する。
- ② 自分の考えをしっかりと持つため、ワークシートを活用したりノートの使い方を工夫したりするなど、学習効果をより高めていくノート指導を行う。
- ③ 自分の意見を発表したり、説明したりする場を授業中に設定する。
- ④ 児童一人一人の習熟状況に応じたきめ細やかな指導（少人数指導）を行い、基礎学力の確実な定着を図る。

(2) 学習習慣の確立

- ① 生活及び学習習慣について、仙台市学力向上推進協議会より講師を招聘し、講演会を実施する。
- ② 放課後や休日の学習支援については、「まなびのひろば」「おもしろ教室」「長期休業中の図書室開放」において効果的な学習の充実に結びつける。
- ③ 「すすくすくタイム」での繰り返し学習、個に応じた内容で学習する「キラキラタイム」の指導において学習内容の定着を図る。
- ④ 「家ででの生活を振り返ろう」と称し、年に3回、家庭生活を振り返る期間を設定し、生活学習習慣の見直し及び改善を図る。
- ⑤ 読書の時間には、「おすすめ図書」のカードを活用し、いろいろなジャンルの本を進んで読む習慣を身に付けさせる。
- ⑥ 家庭学習ノート（「いっしょに国語」「いっしょに算数」）の活用を図り、家庭学習の定着につなげる。

2. 重点課題への取組状況

(1) 学力の定着に関する取組

① 校内研究の充実

・ 実践授業

「自分の考えを持ち、相手にわかりやすく伝えることができる児童の育成」を研究主題とし、児童の表現力を高めることで、学習内容の定着と学習意欲の向上を目指した。実践授業では、「一人一授業」を基本とし、全教員による授業公開をH25年6月～H26年1月にかけて行った。また、各学年部による代表者授業を年4回設定し、授業後には全体で検討会を行い、各学年部で提案している手立ての有効性を確認し、次の実践授業へつなげられるよう取り組んだ。

・ ワークシート活用とノート指導による学習指導の向上

自分の考えをあらかじめワークシートに書き込んでから発表することで、自分の考えを持って授業に参加できるよう、ワークシートを活用した。また、ノートの書き方を学年部単位で統一し、わかりやすく整理されたノート作りを目指した。

・ 「数学的な考え方」を伸ばす指導の工夫

「数学的な考え方」を伸ばすために、文章問題に着目して取り組んできた。問題文に下線を引いたり、記号を書き込んだりすることで、問題場面をより把握できるようにする手立てを学年部単位で統一して指導した。

② 少人数指導の実施

3年生以上の学年において、少人数指導を年間通して行った。また、後期より、1年生での少人数指導を実施し、低学年からきめ細かな指導を行い、基礎学力の確実な定着を図った。



実践授業風景

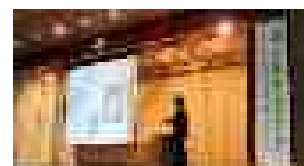
③ 「すくすくタイム」「キラキラタイム」の実施

国語（主に音読・漢字・読書）と算数（主にスキル問題）に取り組む「すくすくタイム」を毎朝10分間設定し、基礎・基本の学力の定着を図った。また、個別指導を要する児童を対象にした「キラキラタイム」を設け、下位群の児童の学力及び学習意欲を高める手立てを講じた。

(2) 学習習慣の確立に関する取組

① 職員研修と「夢教室」の実施

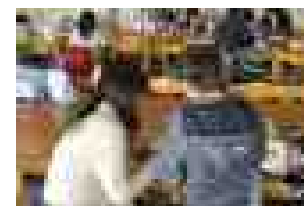
東北大学の荒木剛助教（仙台市学力向上推進協議会）を招聘し、教員を対象に学習意欲と学力向上についての知識と教養を高めるための研修を実施した。また、書いて覚えることの大切さや友達との関わり方、朝食などの正しい生活習慣について、東北大学の川島隆太教授（仙台市学力向上推進協議会）を招聘し、児童・保護者・教員を対象に講演会を実施し、生活習慣の見直し及び改善について啓蒙を図った。



川島隆太教授による講演会

② 放課後や休日の学習支援の充実

放課後に週2回児童の宿題をサポートする「まなびのひろば」、夏季休業中に多様な学びの場を設定する「おもしろ教室」、夏季休業中に児童が読書や調べ学習に取り組めるように「長期休業中の図書室開放」を行い、児童の学びの場や機会を増やすことに取り組んだ。



「まなびのひろば」学習風景

③ 生活学習習慣の見直し及び改善

「家での生活を振り返ろう」と称し、年3回（6月・11月・2月）に児童が「早寝・早起き・朝ごはん」や家庭学習時間など全8項目の家庭生活を振り返る期間をそれぞれ1週間設定した。実施後は、児童の振り返りと保護者からの励ましの言葉を記入し、生活学習習慣の見直し及び改善を図った。また、集計結果を保護者との懇談会での資料として活用し、家庭へ啓蒙を図った。

④ 「おすすめ図書」カードの活用

学年毎に「おすすめ図書」カードを作成し、児童が読書の時間を使っているいろいろなジャンルの本を読むよう推進した。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 仙台市標準学力検査の算数における下位層の割合の経年変化に関する調査

表1は、仙台市標準学力検査結果で目標値を下回っている本校第6学年児童の割合を表している。平成24年度と平成25年度の結果を比較すると、計算力を主とした技能や数量や図形についての知識・理解については下位層の割合が減少しており、以前に比べ学力が定着していることがわかる。これは、本校で実施している「すくすくタイム」での計算練習や、仙台市が作成しているフォローアップシートの活用による成果であると考えられる。一方で、「数学的な考え方」に関しては下位層の割合が増えている。これは、「理由をもとに判断する力」「具体的に説明する力」が十分に身に付いていないためであると思われる。ただし、平成25年度学力検査実施時は、本調査研究実施前であるため、平成26年度の結果を追跡調査し検証する必要がある。

単位 (%)

	関心・意欲・態度	数学的な考え方	技能	知識・理解	全観点下回り
平成24年度	48.2	50.6	43.5	54.1	35.3
平成25年度	49.2	55.7	41.0	45.9	31.1

表1 仙台市標準学力検査の算数における下位層の割合（H24年度とH25年度の比較）

(2) 平成25年度生活・学習状況調査実施時と学年末における家庭学習時間の変容に関する調査

表2は、児童の平日及び休日の家庭または塾における学習時間の時間ごとの本校第6学年児童の割合を表している。本校では、「学年×10分」を家庭学習を行う最低基準時間としている。しかし、2月の調査では、平日の学習時間が1時間未満の児童が7割以上を占めており、4月と比べて1割以上増えていることが分かる。この結果は、以下のことが要因として考えられる。

- ・ 自主的な取り組みが少ないため、反復学習が不足し、基本事項の定着が低い。
- ・ 家庭での学習習慣が身に付いていないため、家庭学習の時間を確保できていない。
- ・ 学習範囲が広がるにつれて、何から手を付けてよいかわからなくなっている。
- ・ 自分の夢を実現するためにどのような力が必要か意識していない。そのため、計画的に学習できていない。
- ・ 周囲の学習意欲の低さに影響され、不安を感じていない。

このことから、低学年のうちから家庭学習で何を学習すべきか提示していく必要がある。また、自分の生活リズムを把握し、見直しをしていく力を持たせることが重要と考える。

単位 (%)

①平日家庭	3時間～	2～3時間	1～2時間	30分～1時間	0～30分	全くしない
4月	5.0	1.7	30.0	45.0	13.3	5.0
2月	0.0	5.2	19.0	37.9	34.5	3.4
②休日家庭	4時間～	3～4時間	2～3時間	1～2時間	30分～1時間	全くしない
4月	0.0	1.7	3.3	13.3	50.0	31.0
2月	0.0	1.7	0.0	17.2	41.7	40.0
③平日 塾	3時間～	2～3時間	1～2時間	30分～1時間	0～30分	全くしない
4月	1.7	5.0	18.3	6.7	1.7	66.7
2月	0.0	1.7	22.4	3.4	0.0	72.4
④休日 塾	4時間～	3～4時間	2～3時間	1～2時間	30分～1時間	全くしない
4月	0.0	0.0	1.7	8.3	8.3	87.9
2月	0.0	0.0	0.0	5.2	6.9	81.7

表2 家庭または塾における学習時間（H25年度生活・学習状況調査実施時〔4月〕と学年末〔2月〕の比較）

(3) 「家での生活を振り返ろう」（年3回実施）における家庭学習時間の変容に関する調査

図1は、各学年の家庭学習時間を毎日「学年×10分」としたときの達成率を表している。調査は、6月、11月、2月の全3回実施し、期間はそれぞれ1週間とした。

1～3年生については、毎回9割以上が各学年で規定された家庭学習時間を達成しており、高い水準を維持している。また、4～6年生については、回を重ねるごとに達成率が上昇している。

このことから、短期間の設定であれば、家庭学習時間に対する意識を高めさせることが可能であり、特に、上学年について家庭学習に対する意識を高めていく手立てとして学習習慣の振り返りが有効であることがわかる。

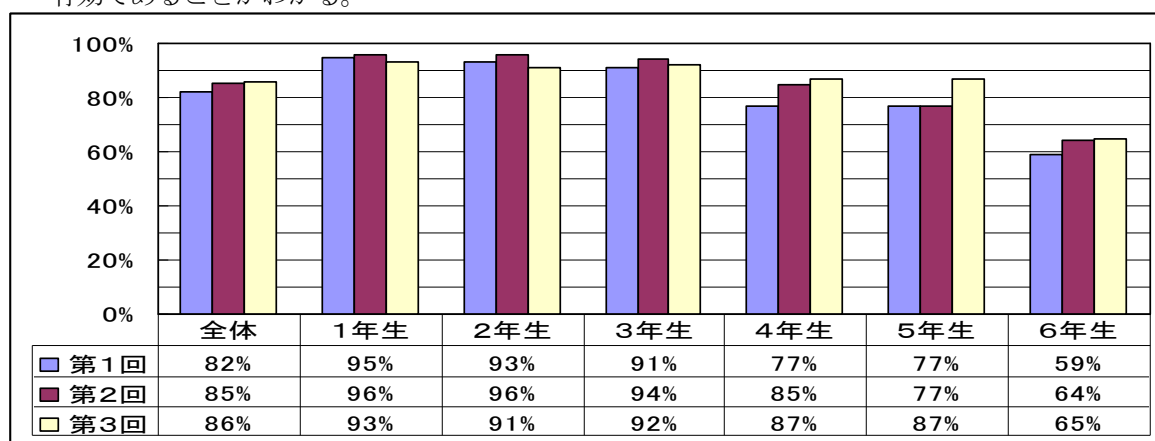


図1 「家での生活を振り返ろう」における家庭学習時間の達成率

4. 今後の課題

(1) 学力の定着に関する取組

本調査より、短時間でのスキル学習の繰り返しや既習内容のフォローアップが、技能や知識・理解の観点における学力を高めることに有効であることが明らかになった。一方で、「数学的な考え方」を向上させる手立てを引き続き探っていくことが今後の課題である。そのために、「理由をもとに判断する力」「具体的に説明する力」を中心に、学習指導を通して児童に身に付けさせていくことを今後の研究の方向性としていきたい。

(2) 学習習慣の確立に関する取組

本調査より、1週間という限定された期間であれば、児童の家庭学習時間に対する意識を高められることが明らかになった。今後の課題としては、より長期間において児童の学習習慣を確立するための手立てを探っていくことである。そのために、児童が自ら生活・学習習慣の振り返りを行う場面を意図的に設定し、取組を日常化していくようにしたい。さらに、保護者に対して、引き続き家庭学習の必要性や重要性を啓蒙していきたい。